慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	タイ語の情報構造に関わる諸表現
Sub Title	Expressions of information structure in Thai
Author	峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.50 (2019. 3) ,p.189- 204
JaLC DOI	10.14991/005.00000050-0189
Abstract	タイ語には、主な統語レベルの要素の移動として、名詞句や副詞句を文頭に移動する「左方転移」と、文末に移動する「右方転移」との2 種の移動がある。本稿では「主語 + 動詞 + 目的語」を基本語順とするタイ語の構文において、統語レベルでの句のいわゆる「移動」が、情報構造とどのような相関を持つかを概観した。 左方転移によって文頭に移動した句は、対比的な主題として機能する。タイ語で主題化できるのは、主語、直接目的語、間接目的語が主なものだが、時空間などの場面の設定に関わる副詞句には、移動の可否に関して意味的な制約がある。 このほか、左方転移に加えて関係詞 thii を付加することで形成された分裂文は、句を際立たせる機能を担う。 右方転移によって文末に後置された句は情報構造上の焦点として機能する。疑問詞や目的語は、焦点化されやすいが、移動には統語構造上の制約もある。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000050-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タイ語の情報構造に関わる諸表現

峰　岸　真　琴

要旨

タイ語には，主な統語レベルの要素の移動として，名詞句や副詞句を文頭に移動する「左方転移」と，文末に移動する「右方転移」との2種の移動がある。本稿では「主語＋動詞＋目的語」を基本語順とするタイ語の構文において，統語レベルでの句のいわゆる「移動」が，情報構造とどのような相関を持つかを概観した。

左方転移によって文頭に移動した句は，対比的な主題として機能する。タイ語で主題化できるのは，主語，直接目的語，間接目的語が主なものだが，時空間などの場面の設定に関わる副詞句には，移動の可否に関して意味的な制約がある。

このほか，左方転移に加えて関係詞 thii を付加することで形成された分裂文は，句を際立たせる機能を担う。

右方転移によって文末に後置された句は情報構造上の焦点として機能する。疑問詞や目的語は，焦点化されやすいが，移動には統語構造上の制約もある。

1 はじめに：「基本」と「逸脱」から見た情報構造

本稿の目的は，タイ語の構文において，「左方転移」あるいは「右方転移」という統語レベルでの構成素の移動が，情報構造とどのような相関を持つかを概観することである。

《本稿の基本的な前提》

言語現象に限らず，一般に人間の認知システムは，「普通」を標準的な枠組みとし，そこから逸脱するものに着目するという特性を持っている。ここ

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 50 号（2019）pp.189~204

で何を「普通」あるいは「逸脱」と認識するかについて，客観的な基準を設けることは困難であるが，この問題に関して，それぞれ表現は異なるにせよ，従来の言語学が常に関心を向けてきたことは事実である。

例えば，構造主義音韻論でいう「無標項」対「有標項」の対立を考えても，そもそも弁別特徴の有無を論じることは，人間がある特徴に着目するという認知的な概念を論じることである。Bloomfield（1933: 171-172）の ‘favorite sentence forms’（英語でいえば，actor-action と command の2形式）もまた，「好まれる」という感覚的な認識を，多くの人に多用される「頻度」という客観的に計測できる表現に置き換えたと考えられる。さらに近年の認知言語学における「前景と背景」なども，背景から逸脱した対象が前景化されるととらえれば，本稿の関心と関連している。

《タイ語の言語類型論上の特徴》

タイ語の基本語順は「主語＋動詞＋目的語」（Subject-Verb-Object）および「被修飾語＋修飾語」（NA）である。タイ語は同じ SVO を基本語順とする点で，一見して英語あるいはフランス語と似ている。しかし，実際の発話では目的語や副詞を文頭に置く「主題化」がしばしば行われることと，話し手と聞き手の置かれた言語的あるいは非言語的文脈において，両者に共有された知識が背景化され，「言上げ」されないという特徴も持っている。生成文法の用語を借りれば，タイ語は「Pro-drop」言語に含められる。この点では，タイ語は日本語をはじめとする東アジアの諸言語に似ている。

このほか，形態音韻的な類型特徴として，5つの語彙的弁別を担う声調を持つ声調言語であること，語に形態変化がなく，単音節を基調とする，いわゆる孤立語であることが挙げられる。このような声調言語では，文の情報構造は，イントネーションなどの音声・音韻レベルで表現されることが少ない。もちろん，発話全体のピッチを高めるとか，発声を強めたりすることで，驚き，非難などの語調が加わることはタイ語にもあるが，日本語のような「文末のピッチの上昇」が疑問を表すといった文音調の対立に基づく表現の体系は存在しない。これは語ごとの声調のピッチパタンを維持する必要があるために，文全体の音調変化の自由度が少ないことと関係していると考え

られる。

本稿では構成素の移動あるいは省略が，一定の意味論的，特に語用論的な機能を果たしているという前提に立って分析を進める。このような機能主義的な観点に立てば，SVO を基本語順としながら，Pro-Drop 言語でもあることから，構成素の移動が担う機能は，タイ語と英語ならびにフランス語とでは異なっていること，また，日本語や英語などでイントネーションが果たし得る機能は，ピッチの変化の自由度が少ないタイ語では，他のレベルが担っていると想定されよう。

タイ語において基本語順からの「逸脱」とみなし得るものは，以下のようにまとめられよう。

（1）構成素の非標準的な位置への転移（dislocation）

a. 名詞句および副詞句の文頭への移動（左方転移）

b. 名詞句および副詞句の文末への移動（右方転移）

（2）構成要素の不在（いわゆる「省略」）

本稿では，これらの「逸脱」のうち，主として（1）の非標準的な位置への構成素の移動を取り上げる。一般に，基本語順から「逸脱」した位置では，認知上の「際立たせ」の効果が生じ，その結果として，何らかの情報的意味を担うことが想定されよう。例えば，タイ語においては，（1）a の主題化については，文脈上，「～についていえば」のように，主題が対比的あるいは限定的な意味を与えられると，従来から考えられている。具体的には，次の2つの観点から考察を行う。

【観点1：転移の情報機能】 左方転移あるいは右方転移によって，移動された要素はどのような情報構造を反映するのか。

【観点2：転移に関わる意味・統語的制約】 情報構造の表現と統語上の移動とは完全に相関するか，例えば統語構造上の制約や，語彙的な意味に関わる

制約によって移動ができない場合は存在するのか。

なお本稿では，タイ語の統語レベルの構成素転移とその情報機能の関係の概要を示すことを目的とするため，例文の使用を最小限にとどめる。「省略」については，それ自体が大きな問題であるが，必要に応じて触れるにとどめる。また例文の5つの声調表記を省略する。このほかに，タイ語には形態レベルの構成素転移として，名詞句から数量句（数詞＋類別詞）が遊離する「数量詞句遊離」がある。これについては，別稿（峰岸：印刷中）に譲ることにする。

2 タイ語の基本語順

以下にタイ語の基本語順と基本的な構文を挙げる。

2.1 一項あるいは二項を含む基本構文：SV(O)

タイ語の基本語順は「主語＋動詞＋目的語」（S-V-O）である。ここで，ある事象（同定などの命題文を含む）の一義的な参与者は主語として叙述動詞の直前に，二義的な参与者は目的語として動詞の直後に現れる。一連の談話あるいはテキストは，ある一義的参与者が主題＝主語となって展開され，それに関わる事象の叙述が累加されることで，その一義的参与者を中心とした情報が蓄積される。

以下の例文では，当該例文において基本語順であるSV(O)の語順が維持されていることを角カッコ[　]あるいは波カッコ{　}で示す。ただし，角カッコと波カッコの違いは，両者の対応関係を示すだけで，形の違いに意味はないものとする。本稿の特徴的な表記として角カッコと波カッコが，「[X{Y]Z}」のように交差することがある。この場合，構成素[XY]が角カッコ内にあり，かつ{YZ}が波カッコ内にあることを示す。つまり構成素Yは両方のカッコ内に含まれる。また，ある文脈では省略可能な要素を丸カッコ(　)に入れて示す。このように，波カッコと角カッコが交差することは，句構造分析では許されない構造だが，動詞連続構造「V1-N-V2」を持つタイ語では

「V1の目的語が同時にV2の主語である」ことが一般的であるため，本稿であえて工夫した表記法である。例文についての文脈的な情報を太字角カッコ【　】に入れて示す。

（1）　fon　　tok
　　雨　　降る（落ちる）
　　雨が降る。　[S-V]

（2）　[(chan)　　hay　　(naŋsɯɯ)]
　　私　　あげる　　本
　　私が本をあげる。　[S-V-O]

一義的および二義的参与者は，話し手と聞き手の両者の間で共通理解が得られる文脈では省略可能であるが，二義的参与者の特定が「叙述」の一部として焦点となり，情報上の価値を持つことも多く，その結果として省略されないこともある。

この基本的な文に，さらに副詞句が加わる場合，目的語よりも後，すなわち文末に置かれる。文末には目的語が，さらに副詞句があれば副詞句が文末に置かれるため，情報構造の観点からは，あるタイ語の叙述において，文頭は主題（おおくは旧情報）の位置に，文末に近いものが情報の焦点（多くは新情報）の位置に置かれることになる。

2.2 やりもらい文

授受の表現は，典型的には「与える人物」から「与えられる物」が「与えられる人物」へ移動することを示す構文である。タイ語では，「与える人物」が一義的参与者として主語の位置に，「与えられる物」が二義的参与者として動詞の直後の直接目的語（DO: Direct Object）の位置に，「与えられる人物」が三義的（つまり，非一義的かつ非二義的）参与者として，SVO の外側である文末の間接目的語（IO: Indirect Object）の位置に現れる。

(3)　[chan　hay　naŋsɯɯ]　dɛɛŋ
　　私　あげる　本　デーン
　　デーンに私が本をあげた。　[S-V-DO-IO]

(3) は一般的なやりもらい文の例である。DO と IO の両者が明言される場合，語順は常に DO-IO の順となる。

2.3 動詞連続構文

動詞連続構造は東南アジア大陸部の主要言語にみられる特徴的な構文であり，「形態上の変異を持たない動詞句（動詞＋名詞句）が並列する構文」と定義できる。動詞連続内の動詞句の間の関係には，継起的な事象，動作の目的や因果関係を表すなど，さまざまなものがある。

(4)　[dɛɛŋ　yiŋ　{lek] taay}
　　デーン　撃つ　レック＝死ぬ
　　デーンがレックを撃ち殺した。

(4) は，他動詞句「デーンがレックを撃つ」(SVO) と，自動詞句「レックが死ぬ」(SV) の2つの事象が継起的に，あるいは因果関係として把握されていることを示す動詞連続文の例である。

以上2.2および2.3の例から，やりもらい文，動詞連続文のそれぞれにおいて，原則的に [SVO] が保持されている。この意味で，タイ語の「標準的な構文 SVO」は，基本的な構文であると考えられる。

以下では，基本語順からの逸脱である左方転移および右方転移のそれぞれについて，転移された構成素がどのような語用論的意味機能を担うかを検討する。

3 左方転移：主題化

タイ語の左方転移では，文中の構成素（主として名詞句）を文頭におくことで，文の明示的主題として機能することが一般に知られている。主題化された構成素は対比的な意味を持つ。

3.1 一項（S-V）あるいは二項述語（S-V-O）文

タイ語では，直接目的語が左方転移されることはよく知られている。つまり，目的語の左方転移は，中核的構文 SVO の維持の原則を乗り越えた「逸脱」であると考えられる。

一項動詞は動詞の目的語がないため，目的語の左方転移は当然不可能である。しかし，（5）b. のように，関係詞 thii「～の方」を用いて分裂文を形成し，主語を叙述の焦点として取り出すことができる。これは，文頭にある主語をとりたてるために文頭に残しつつ，関係節を主語と同格相当のものとして右方転移を行ったものと考えることもできる。

（5） a. dɛɛŋ　maa
デーン　来る
デーンが来た。

b. [dɛɛŋ]　rəə　thii　maa　naʔ
デーン　疑問　関係詞　来る　句末詞
デーンなのか，来たのは？【他でもない，デーンが，と，第三者に確認する文】

（6）は，動詞「食べる」の目的語を文頭においた文である。「あの菓子」はほかの菓子や飲み物などと対比された意味を持つ。

（6） khanom=nan　[dɛɛŋ　kin　pay　lɛɛw]
菓子＝あの　デーン 食べる 方向　完了
あの菓子はデーンが食べちゃった。【それ以外のお菓子は残っている，

など】

3.2 やりもらい文

やりもらい表現に関して，直接目的語および間接目的語は，ともに左方転移により主題化が可能である。

(7)　naŋsɯɯ　chan　hay　dɛɛŋ
　　本　　私　与える　デーン
　　本は（私が）デーンにあげた。【鉛筆は，キアウにあげた。…】

(7) は，直接目的語の左方転移の例である。実際の話し言葉では，主題化された目的語の後にポーズは置かれず，主題の標識も不要である。ただし，文字で書く場合には読みやすくするための工夫として，主題化された要素の後に「,」を入れることもある。

やりもらい文で左方に転移された直接目的語は，対比的な主題として，「本（直接目的語）は」デーンに与えられたが，他のもの，例えば鉛筆はそうではない」ことを含意している。

(8)　a. dɛɛŋ　[chan　hay　naŋsɯɯ]
　　デーン　私　与える　本
　　デーンには私が本をあげた。【キアウにはペンをあげた。…】
　　b. dɛɛŋ,　hay　aray;　khiaw,　hay　aray ?
　　デーン　与える　何；　キアウ　与える　何
　　デーンには何をあげて，キアウには何をあげたのか？

(8) a, (8) b. は間接目的語もまたやりもらい文において左方転移されることを示す例である。主題化された間接目的語は，「【他の人にではなく】デーンには」という対比的意味を持つのは，直接目的語の主題化と同様である。

3.3 動詞連続構文

「作ることができる」は，タイ語では「作る」を第1動詞（V1），「できる」を第2動詞（V2）として，目的語を両者の間に置く動詞連続で表現される。

(9)　tham　khaaw=hɔɔ=khay　day
　　V1: 作る　O: オムレツ　V2: 可能
　　オムレツを作れる。【説明的・中立的な言い方，ほかにもいくつも列挙できる。】

目的語「何を」作れるかを問う疑問文は次のようなものがある。

(10)　a. tham　aray　day?
　　V1: 作る　何　V2: 可能
　　何が作れますか？
　　b. thii　tham　day　mii　aray　baaŋ?
　　関係詞　V1: 作る　V2: 可能　ある　何　【不定】
　　作れるのは何がある？
　　【あれもこれも作れないので，どれなら作れるんだ？と聞く場合。】
　　c. aray　tham　day　aray　tham　may　day?
　　何　V1: 作る　V2: 可能　何　V1: 作る　否定　V2: 可能
　　何は作れて，何は作れないの？【対比的主題には用いることができる。】

(10) a. は最も中立的な質問文である。(10) b. は，関係詞 thii を用いて名詞相当句「作れるもの」を左方転移で作ったものであるが，これは相手があれもこれも作れないことを知ったうえで，どれなら作れるんだ？と聞く場合などに用いる。(10) c. は，やはり名詞相当の関係節を作って文頭に置き，「作れるのは」と「作れないのは」とを対比的に表した文である。

4 右方転移：後置

タイ語の右方転移は，文中の構成素（主として名詞句）を文末におくことで，文の明示的焦点として機能することを示す。一般に焦点化された構成素は新情報である。

4.1 一項あるいは二項述語文：主語は右方転移できない

名詞句が主語の一項しかない場合，それを焦点化するために右方転移することは，タイ語ではできない。以下は疑問文の例であるが，疑問の焦点を転移して文末に置くことはできない。

（11） a. aray　tok　（S-V）
何【疑問】　落ちる
何が落ちたの？【台所で物音がしたので】
b. *tok　aray　（V-S）
c. caan　tok　（SV）
皿　落ちる
お皿が落ちた。

文全体を新情報とする現象文は，文頭に mii「存在する，ある」をつけた動詞連続文とすることで形成される。

（12） mii　aray　tok　（mii SV）
存在する　何【不定】　落ちる
何かが落ちたよ。【見に行って，拾って！】

（12）は，何か落ちたような物音がしたために，何が起きたか見に行って確かめてほしい，といった場合に用いられる。何かが落ちたことが分かっていて，それが何かを焦点として尋ねる場合，つまり「何」だけが新情報であっても，文頭の mii は必要である。

4.2 やりもらい文

（13） a. [khray　hay　(naŋsɯɯ)]　dɛɛŋ?
　　誰　　あげる　　本　　デーン
　　誰が本をデーンにあげたか。
　　b. [chan　hay　(naŋsɯɯ)]　dɛɛŋ
　　私　　あげる　（本）　デーン
　　私が本をデーンにあげた。

（13）a. は主語（与える人物）を疑問詞として，情報の焦点化した文であり，(13)b. はそれへの応答である。疑問文の焦点である主語「誰が」も，応答文の焦点である主語「私が」も，ともに文頭位置に置かれており，これらを文末に置く右方転移は行われない。

（14）は直接目的語が疑問の焦点である例である。(14)a. は適格文であるが，「何を」を右方転移した（14）b. は容認されない。

（14） a. kɛɛ　hay　aray　dɛɛŋ?
　　君　与える　何　　デーン
　　君はデーンに何をあげたのか？
　　b. *kɛɛ　hay　dɛɛŋ　aray?
　　君　与える　デーン　何

4.3 動詞連続構文

タイ語では疑問詞が主語の位置にある場合，これを右方転移することはできないようである。このことは，動詞連続の場合にも当てはまる。

（15） a. tham　aray　day?
　　V1: 作る　何　V2: 可能
　　何が作れますか？

b. *tham　day　aray
V1: 作る　V2: 可能　何

(16) a. tham　day　khaaw=hɔɔ=khay
V1: 作る　V2: 可能　O: オムレツ
オムレツを作れます。【「ちゃんと作れるのはオムレツです」と，オムレツに情報の焦点がある。】

b. khaaw=hɔɔ=khay　tham　day
O: オムレツ　V1: 作る　V2: 可能
オムレツは作れます。【オムレツに限り，作れますが，他は作れません，とオムレツを他と対比して挙げている。】

4.4 選択疑問の名詞節の後置

これまで名詞句の右方移動を取り上げて分析をおこなったが，名詞節の場合を以下に示す。動詞 ruu「知っている」は，名詞句あるいは名詞節「～ということ」を目的語に取ることができる。may「疑問詞：～か」は，選択疑問文を作る疑問詞である。

(17) a. kεε　ruu　may　waa　[lek　maa]
君　知っている　疑問詞　接続詞　レック　来る
君はレックが来たのを知っているか？

b. *kεε　ruu　waa　[lek　maa]　may
君　知っている　接続詞　レック　来る　疑問詞
君はレックが来たのを知っているか？

(17) のように，肯定文「レックが来たこと」の後に，知っているかどうかを尋ねる疑問詞 may を右方転移することはできない。しかし，(18) のように，疑問文「レックがどこにいるか」を尋ねる場合は，may を右方転移することができる。

(18) a. kɛɛ ruu may waa [lek yuu thii-nay]
君 知っている 疑問詞 接続詞 レック いる どこ
君はレックがどこにいるかを知っているか？

b. kɛɛ ruu waa [lek yuu thii-nay] may
君 知っている 接続詞 レック いる どこ 疑問詞
君はレックがどこにいるかを知っているか？

「どこにいるか」を「いつ来たか」maa muaray に変えても同じように適格文となる。この場合の右方移動の可否は，情報の焦点や新旧とは関係なく，構造上の制約のためではないかと考えられる。(17) b. の場合のように may を文末に置くと，ruu may「知っているか」ではなく，may の直前の maa「来る」と結び付けた maa may「来たか」という構造解釈も可能になり，構造上の両義性を生じてしまう。一方，直前に疑問詞があれば may は「どこにいるか」あるいは「いつ来たか」と結びつく可能性がなく，ruu としか結びつかないため，両義性を生じる可能性がない。

4.5 副詞の位置による表現

ここでは，副詞句の左方移動について考える。一般に時空間や原因を尋ねる副詞もその答えも，情報の焦点として文末に置くことができる。

しかし，thiinay「どこに」の場合，文頭に置くことはできない。

(19) a. dɛɛŋ yuu thiinay
デーン いる どこ
デーンはどこにいるのか？【客観的な問い：疑問の焦点は「場所」にある。】

b. khaw yuu thii kruŋ=theep
彼 いる バンコクに

彼はバンコクにいる。【場所の副詞は文末に置く：疑問の焦点は「場所」にある。】

c. *thiinay　dɛɛŋ　yuu

どこ　デーン　いる

デーンはどこにいるのか？【客観的な問い：疑問の焦点は「場所」にある。】

一方，時間の副詞 mɯaray「いつ」は，文頭，文末の両方に置くことができる。

(20) a. dɛɛŋ　ca=maa　mɯaray

デーン　未然＝来る　いつ

デーンはいつ来るのか？【客観的な問い：疑問の焦点は「時」にある。】

b. mɯaray　dɛɛŋ　ca=maa

いつ　デーン　未然＝来る

いつになったらデーンは来るのか？【文頭で主題化：感情的な問い【約束の時間が過ぎているのに！】】

このような表現内容の違いを表せるのは，タイ語の時間の副詞が，「いつ」のように単なる「時点」を示すだけでなく，日本語で言う「いつになったら」のような「一定時間の経過ののちに～が生じる」のように「時間経過，推移」のような意味を持つためではないかと思われる。

(21) a. dɛɛŋ　maa　thammay

デーン　来る　なぜ

デーンはなんのために来たのか？【何をしに来たのか：不思議に思って。】

b. thammay dɛɛŋ maa
なぜ デーン 来る
デーンはなぜ来たの？

(21) a, b. ともに，発話の語調によっては非難するニュアンスにもなる。例えば，「招待もしていないに，なんで来たんだ！」と文句をつける場合など。非難の意味の有無はともかく，原因・理由を尋ねる thammay「なぜ」は，その語源が tham「する」+aray「何」，「何をする」が語彙化したものであると考えられている。

5 まとめ

本稿では，タイ語において基本的な構文と考えられる S-V 一項文，S-V-O 二項文，やりもらい三項文，動詞連続構文について，主として名詞的な構成素を左方あるいは右方に転移したとみなされる構文を取り上げた。

分析の結果，左方転移は構成素を文頭に置くことにより，対比的な主題として明示する機能を持つことが確認された。タイ語で主題化できるのは，時空間の場面設定子，動作主，被動作主，受益者（間接目的語）である。もともと文頭にある主語をさらに文頭に置くことはできないが，関係詞を用いて分裂文を作ることで，主語要素を取り立てて表現することはできる。

一方，構成素を文末に置く右方転移では，句を文末に後置することで，情報構造上の「焦点化」する機能を持つことが確認された。ただし，右方転移の可否を決定するのは情報の新旧だけではない。疑問文の疑問詞は情報の焦点と考えられるにも関わらず，これを右方転移することはできない。また，名詞節を目的語とする場合，選択疑問詞の右方転移の可否は，名詞節に疑問詞が含まれているかどうかによる。疑問副詞は原則文末に置かれるが，「いつ」「なぜ」については文頭に置くこともできる。

なお，本稿の内容は，ごく限られた例文から得られたものであるため，今後さらに詳細に研究を進める必要がある。

謝辞

【和文】：本研究は JSPS 科研費 JP 17H 02331 の助成を受けたものである。

本研究のタイ語例文の作成とチェックに際しては，スニサー・ウィタヤーパンヤーノン氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー：タイ語学，タイ語教育学）の協力を得た。

参考文献

Chafe, W. (1976) ‘Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view’, in Li, CN ed. Subject and Topic. pp. 25-55. New York: Academic Press.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom (2005) A Refernce grammar of Thai, Cambridge: Cambridge University Press.

峰岸真琴（印刷中）「タイ語の数量表現について」『言語の類型的特徴対照研究会論集』所収.

峰岸真琴 2014.「対照研究で読み解く日本語の世界タイ語との対照：出来事と格関係を中心として」『日本語学』pp. 66- 77. 明治書院.

Minegishi, Makoto. 2011. “Description of Thai as an isolating language”. Social Science Information, March 50: 62-80.

峰岸真琴 2006.「タイ語の名詞句構造」, pp. 89- 118.『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』, 東南アジア諸言語研究会（編）, 慶應義塾大学言語文化研究所.

【口頭発表】

Minegishi, Makoto. “Topic and Government in Thai, an Isolating Language”, ‘Explorations in Syntactic Government and Subcategorisation’, 2011/8/31-9/3, University of Cambridge.

峰岸真琴.「タイ語・カンボジア語の数詞句」（『言語の類型特徴をとらえるための対照研究会第5回公開発表会』. 2017/ 8/ 12）